

述懐

世の中は高きいやしきほと／＼に 身をつくすこそ務めなりけむ

○ 眞木柱立しころをうかすな 世にはあらしの吹き荒ふとも

○ 己か身をかへりみすして人のため つくすや人のつとめなるらむ

折にふれたる

何ことも思ふかまゝにならざるか かへりて人の身のためにこそ

○ 家富みて厭かぬことなき身なりとも 人のつとめをおこたるなゆめ

行

世の中の人のつかさとなる人の 身のおこなひよ正しからなん

昭憲皇太后御歌

筆寫人心

とるふてのあとつかしとおもふかな ころのうつるものと聞きては

田家夜

こかひするときとしられて燈火の かけもねふらぬ小山田のさと

慎獨

ひとりのみおもふ心のよしあしも てらしわくらむ天地のかみ

金

もつ人のころによりてたからとも ちたともなるは黄金なりけり

光陰如矢

ますらをかゆつるにかけて放つ矢の 目にもとまらずゆく月日かな

正心

かへりみてころに問はれ見ゆへきを 正しきみちになにまどふらむ

寄國祝

君と臣のみち明らけき日の本の くにはうこかしよろつ世までに

寒月照梅花

みかきもる人をそおもふ風さゆる しもよの月にうめの花見て

四海清

おほやしまゝいつくしみの廣き世は なみの千里もとなりなりけり

人力車

さのみちを人にひかせて心なく くるまのうちにねふりけるかな

後陽成天皇御勅言

善事は小なりとも、よくつとむべし、悪事は小なりともなすべからず、小をつまざれば、大をなすことなし
能く人のいふことなれど、これをわきまふるものなし。

人主の諸道をしらざるは、破れ笠の如く、大木の枯れたるが如し、おのれが心に勝つものは、能く人に勝つ
おのれが心にまくるものは、能く人にまくるなり。

御製

めに見わぬ神に向ひて恥ぢざるは人の心のまことなりけり

われどわが心をりくかへり見よ知らずしらすもまよふことあり

徳川家康の訓話

家康或時の話に、國を治るの道三ツあり、一に曰く國を量り、二に曰く人を量り、三に曰く食を量る、國の
大小地の遠近田畠山野海川を能く知て之を治るを國を量ると言ふ、人の衆寡を量り産業に迷はざる様に治る
人を量ると言ふ、食の饒乏を量り之を治るを食を量ると言ふ、此三ツのものを知らざれば國を治むること
能はず、故に民多き時は新田を開かせ山野海川の働をさすへし然る時は國富み民集まる民少き時は新開をさ
すへからず新開する時は本田必ず不出來なるものなり夫民は國の本なれば善く國を治る者は民を多く仕立
農工商其釣合を得る時は世能く治まれり運世に至るに及びては君其道を失ひ榮華を好み居宅衣類器物の數寄
に金銀を費す之に依り工商の身過ぎ善し是に於て百姓本を捨て末に趨り游民日に益々多く國日に益々窮し亡
命の徒聚り盜を爲すものなり是を不戰の亂國といふ足利義持の時昇平日久く柔懦侈靡に慣れ群臣の家に宴游

し其政を恤へず臣下權を專にし賄賂公行し正人は廢斥せられ讒諛の徒志を得風俗日に敝れ降りて義教に至り天下大に乱る嚮に義教をして道を知らしめ私門を抑へ公室を強くし姦邪を黜け正直を進めば即ち國家必ず興るへきに悲哉、反て義持の覆轍を蹈み威柄下に移り復た收むべからず義勝義政に至りては名計りの將軍にして如何ともすべきことなし故に善く國を治る者は士農工商の鈞合を能くして萬民をして皆其所を得せしむる國家を保つ長久なる所以なりと言はれけり

又曰く明君良將と曰ふは人の爲す所の善き事を取用て國を治めたり昔源賴朝藤原泰衡を討て陸奥を平け其跡の仕置をせしに秀衡仕置の如くと書て所々に高札を建てし故奥州忽ち治りたり其高札奥州には今に至るまで往々之あり予も嘗て之を見たり賴朝の如きは能く人の善き所を用ひしと言ふへしと言はれけりさればにや家康甲斐を領するに及びては武田氏の法を用ひ關東を治るに及びては北條氏の舊に従るは是を以て速に平治せり只年貢を取ることは三河の例に據り軽く取りし故民益々其德に服せり

徳川秀忠嘗て使を駿府に遣はす、家康使者に謂て曰く其方こと將軍へ出頭して諸事の用も心易く申付けらるゝと見わたり去らばこそ今度の用事も其方を差越されたれ貴も賤も主の氣に入る様に奉公を勤め爲すと云ふことは成り難きものなるに一段のことなり夫に付其方杯の心入大事なり今に至ては近習外様へ掛け大勢の諸侍共將軍の情を感じ過分と喜び思ふ様に致すへきも又恩を請けながら思とも思はず恨み不足ある様に致さんも其方杯が心一つなり此段能々分別致すべく第一主人の目見能きは我知らず奢の付くこと古今の人情なり

奢はいつでも堺もなく付くものなれば我心には奢とは覺わぬ様なれども他人の目には早くも見ゆるものぞ奢が付けば必ず怠りと云ふものになり怠から萬事の悪事は出來ると合點して前方より用心をして主の氣に入り念頭に成る程猶々謹み恐れて我儘をせぬ様にと思ひ傍輩の交りにも依帖量負の心を離れ免角其者の人柄心入を見届け將軍の爲めを大切に存じ能く奉公致し後には頭奉行役人杯にも成り兼間敷と見ゆる者ならば何程我と不合となる者をも引廻し目を懸て奉公致し安き様にするが能きぞ況て我と中能き者は申に及ばず去ながら輕薄者と實義なる者とを能く見知りたるが能きぞ第二には我獨り出頭して一人して事を將明けたがる様に致す是又大なる病なり左様の心入の者は何程才智發明にても當座將明く様にありても必竟仕そこなひあり何の役にも立ぬ器量と云ふへし仔細は乗物に乗て歩行くに力も丈も格好も揃ひたる六尺にて前後二人して昇き其外に副肩とて前後に手を副へ力を付て其上にも替肩とて幾人も前後に立副てこそ切所難所長旅も心易く乗れるものなれ如何に力が強きとて一人しては昇かれもせず假令昇かばとて乗る者も心安かるまじ脇から見ても危し其如く天下國家を保つと云ふは形の如くの重荷なり、其重荷を一人にて持つは如何と思ひ臣下と云ふ我に劣らぬ相談相手は何人も撰み舉げて官祿を與へ置き其者共と力を合はせてこそ國家を保つことなるに他人を交へず一人して主の相手に成らむと思ふは散々惡敷分別なり乗物の前後に能き六尺多く付けば如何様の山阪も遠き旅をも行く如く天下國家を治るにも能き家老共多く寄り集り心正しき奉行諸役人を撰み何事も打割り談合評定して仕置をするは世間無事にて幾世も續く道理なり國家の寶は人より外にはなし去るに依

て古より忠臣良士と名を呼はるゝ程の者共我功を立てず榜輩の中より賢良の士を見立て幾人も薦め舉て主人の用に立つ如く致すと見たり此旨能々心得て江戸へ歸り候はゞ同役共へも語り聞かせよと言はれり前波宗入談伴にて四方山の物語の時或田舎の庄屋が替者に平家を語らせ一村の者に聞かせしに里民ども聞誤りて平家汁を振舞ふと聞き一村打寄りこは珍事こそ出来たれ平家と言ふもの如何にして食はんかと議す一人曰く何某の老人こそ斯る表正しき作法は心得てあれば行きて問ひ見んとて尋ね行きしに老人常に我事を老耄なりとて構ひ給はされど是事は心得てこそあれ此汁啜らん者は新しき椀を用意して喰ふ習ひなれと教ふ何れもされば年の勞程あれとて新しき椀を懐に入れて庄屋が許に集り今に汁を進むるかど人々待煩ふ處に思ひの外に替者一人出来て長々と平家を語り終て後何を供する様もなければ皆望を失ひて歸りぬるとぞ斯る抵悟の話もあるものかなと笑ひながら申せば家康には聞終て俄に宿老の人々を前に召し半入に只今の話今一度彼等に語りて聞かせよとありて又同じ物語せし上にて偕何事も末になりては斯く違ふものなれ汝等が我命を下々へ言ひ傳ふるに能く同僚と商議し人々異議なき様にすべし去らずば汝等か傳へ誤りと下々の間違ひとよりして毫釐の事も千里の違ひに至るなり是には心得あるべきことと教諭ありしとぞ

豊臣家の伽衆會呂利伴内一日來り種々の物語の中に大黒と申神を福の神とて人々祝祭けれども曾て福の神の理の知りたる人希なりと申す家康聞て大黒に如何様の理ありやと尋ぬ會呂利されば大黒の形は眉を高く作り其上に頭巾を着せり是ぞ該の大黒の心なり仔細は眉を高く作り其上に頭巾を蒙らせたるは自ら上の事を見申

さすされば奢の心之なく一分を守れば自然の幸來るべしと申ことを形に顯はして作り教に致したるものと申す家康聞て一段尤もなりさもあるべきことなり昔より五字七字と言ふことあり其五字とは上な見そと言ふ此の五字なり七字と言ふは身の程をしれと言ふ七字なり此二つを能く守る時は貴賤共に全うして終に幸を得るこのことなり偕大黒に一重上の心ありは大黒の極意なりあたりて見よと言はるゝ會呂利暫く思案しけれども頭巾より上の道理存寄りなき由申す家康大黒の常に上を見さることも肝要の時其頭巾を脱て一度上を見んと極意なり譬へば侍の常に腰の刀を研磨きて能く刃を付け鞘走らぬ様に差すは肝要の時一度抜かんが爲めなり總て侍の常に命を全うして身を養生するも一度氣の詰る所に於て一命を捨んどのことなり只に養生せんとの志にあらず腰の刀も一代拔出すへからすんば其益なし大黒の頭巾も此の如し凡そ人愚にして大黒頭巾の處に計り心を留め抜く時を知らざるは琵琶柱に膠するとやらんにて本意に叶ふへからす只うへな見そに止るへからさることはは大黒の極意なりと

家康老臣と談話の時各小僧三ヶ條と言ふことを知りたるかと尋ねらるゝ何れも承りたることなしと申す家康さらば聞かすへし或山寺の僧里より一人の弟子を取りたり小僧にして召使ふ所に此小僧或時迷下り親の許へ歸りて申すは我等事柄様に頭丸め申すからは何卒學問をも勤め出家を遂げ度と存じ今迄随分と堪忍致しけれども師匠坊餘りに無理なる事計り申し折檻致すに付き何とも堪難くて歸り來ると言ふ親共聞て夫程迷惑致すとあらば如何様の事ぞと問へば小僧常々とても是こそ尤と存ずるとは之なく中にも差當り迷惑なること三ヶ

條之あり第一には師の坊髪を剃習ふべしとて剃らせけれども我等剃習ひのこと故時々は剃刀の先の入ること
も之あり血杯出ければ大に折檻を致され候第二には味噌を摺るに味噌の摺様悪しきとて朝夕打擲致され候第
三には用をたしに雲隠に参れば是亦雪隠に行くが曲事とて折檻に逢申候箇様の次第にて一生勤まり申もの
に候哉と言ふ親共聞て左様のことどもにては其方居たたまり難く存すること尤もなりと腹立し即時に寺へ行
き住寺に逢て種々不足を申し小僧を取返すべしと言ふ師の坊聞て申様總じて沙門の勤めは六ヶ敷ものなる故
其身を初め二人の親迄も何卒出家を遂げさせ度くと存じてさへ遂ぐるは稀なるに況してや其身杯も小僧が申
すを誠と思ひ兎や角と小僧の儀を言はるゝ心にては出家は遂まじければ望みの如く小僧をば親元へ返すへし
さりながら諸旦那方への前もあれば右三ヶ條の言譯を致すなり、先づ味噌の摺様悪しきとは別儀にあらず寺
も在家も味噌をば榎木にてこそ摺るものなるを小僧めは塗り杓子の脊かりて摺たるに付朝夕拙僧世話にして
申付くれども一圓聞入れず頃日までに杓子のみ三本も摺破り候とて膳部の脇より取出して之を見する次に雪
隠へ行て用をたすを叱りたるとあるは是も仔細あることなり各々も存知の通例年代官衆當村へ参られし時は
定りて當寺を宿に致さるゝに付雪隠遠くては不自由にあるへきとて地下中相談にて馳走の爲め計りに客殿の
近所に新しく雪隠を作りたり代官衆響應の爲めに致置くことなれば愚僧を初め誰にても此雪隠へ行者もなきに
小僧め一人請取にして参るに付度々申付くれども少しも聞入れず儲又髪を剃候こと出家の勤も同前なれば如
何にもして剃習ひ候へども我等頭を筆紙に擬へ手習に剃らせければ頓て剃習ひ此頃は己が頭を自剃する程に

成りたるに付況てや人の頭を手際能く剃り候故此程も我等髪を剃らせければ態ど如此く致したるとて頭巾を
脱したるを見れば何十ヶ所と言ふこともなく切りはつり頭内は血留を付て疵薬を塗付たり小僧か親是を見て
横手を打ち大に驚き迷惑して段々の詫言を盡しけるとなり、是を小僧三ヶ條と言て輕き事の様なれども國持
大名を始め其外家老、用人、頭奉行、目附、横目役杯勤る面々は此心使肝要なり、一方を聞て沙汰に及ふ時
は格別の相違ありたがるものなりと言はれけり

島津忠良日新齊の「いろは歌」

いにしへの道をききてもとなへてもわか行ひにせずはかひなし
樓のうへもはにふの小屋も住む人の心にこそはたかき賤しき
はかなくもあすの命をたのむかなけふもくくと學びはせて
似たるこそ友としよけれ交はらはわれにます人おとなしき人
ほどけ神他にましますます人よりも心に耻ぢよ天地よく知る
へたそとてわれもゆるすな稽古たにつもらはちりもやまと言の葉
とかありて人をきるともかろくすなにかすかたなもたゞ一つなり

智恵能は身につきぬれと荷にならず人はおもんしはつるもの也
 理も法もたゞぬ世そとてひきやすき心のこまのゆくにまかすな
 ぬす人は他處より入ると思ふかや耳目の門にとさしなくせば
 るつうすと貴人や君か物がたりはじめてきけるかほもちそよき
 小車のわかあくこうにひかれてやつとむるみちをうしと見るらん
 わたくしをすてゝ君にしむかはねは恨もおこり述懐もあり
 學文はあしたのしほのひるまにもなみのよるこそなほしつかなれ
 よきあしき人の上にて身をみかけ友はかゝみとなるものそかし
 禮するは人にするかは人をまたさくるは人をさくるものかは
 そしるにもふたつあるへしおほかたは主人のためになるものとしれ
 つらしとてうらみかへすなわれ人にむくひくはてしなき世そ
 ねかはすはへたてもあらしいつはりの世に誠ある伊勢の神垣
 名をいまにのこしおきける人もひと心も何かおどらむ
 樂も苦も時過ぎぬればあどもなし世にのこる名をたゞ思ふへし
 昔より道ならずして驕る身の天のせめにしあはざるはなし

三
 二うかりける今の身こそはまへの世と思へは今そ後の世ならん
 二ゐにふしてさらにはおくと夕露の身をいたつらにあらせしか爲
 一のかるましとてをかねて思ひきれ時にいたりて涼しかるへし
 おもほはすちかふ物なり身の上の欲をはなれて義をまもれ人
 くるしくもすく道をゆけ曲折の末はくらまの倒まの世そ
 やはらくといかるをいはゝゆみとふて鳥にふたつの翅とを知れ
 萬能も一心とありつかふるに身はし頼むな思案堪忍
 賢不肖もちひすつるといふ人もかならずならは殊勝なるへし
 不勢とて敵をあなとることなかれ多勢を見てもおそるへからず
 こゝろこそいくさする身の命なれそろふれば生きそろはねは死す
 回向にはわれと人とをへたつなよ看經はよししてもせずとも
 敵となる人こそは我師匠そとおもひかへして身をもたしなめ
 あきらけきめもくれ竹の此世より迷はゝいかにのちのやみ路は
 酒も水なかれもさけとなるそかし只なさけある君か言の葉
 きくこともまた見ること心から皆まよひなりみなさとりなり

ゆみを得て失ふことも大將のこころひとつの手をはなれずめくりてはわか身にこそはつかへけれ先祖のまつり忠孝の道にたゞ身をはすてんどおもひどれ必ず天の助けあるへし舌たにも齒のこはきをはしる物を人は心のなからましやはゑへる世をさましもやらてさかつきに無明の酒をかさぬるはうしひとり身をあはれと思へものことにたみにはゆるす心あるへしもろくの國や所の政道は人にまつよくをしへならはせ善にうつりあやまれるをはあらためよ義不義はうまれつかぬ物也すこしきをたれどもしれりみちぬれは月もほどなきいさよひの空

島津齊彬の訓諭

- 一、人心の一致一和は政治の要目なり
- 二、民富めば國富むの言は國主たる人の一日も忘るべからざる格言なり
- 三、人君たる人は愛憎なきを要す

四、凡そ人は一能一藝なきものなし、其長短を採擇するは人君の任なり

五、既往の事を鑑みて前途の事を計畫せよ

六、勇斷なき人は事をなす能はず

七、國政の成就是衣食に窮する人なきにあり

又嘉永五年四月齊彬自ら條令三章を作りて

藩士に令し風俗を矯め勤儉を奨めり其大要に

- 一、弘化中、中外出入並酒會を催ふし制規を紊ることを禁せしも頃日稍々弛み其禁を犯すものあり、爾後近侍の者も舊制を守り要用あるにあらざれば猥りに酒宴に臨むべからざると
- 二、天明中弓砲の勝負を賭することを禁せり、これ風俗を紊亂するに因る、頃日聞く賭博に擬し銃丸を貪るのみならず當日缺場するものは贖丸を爲さしむものありと、是れ勵精技を競ふに似たりと雖も徒に射中を争ひ博利に偏し修技の本意を喪ひ特に風俗を紊亂するの患あり、嚴に其惡弊を絶ち眞に武技を研究すべき事

三、衣服の制は節儉を崇ふ、華麗の絹布等は必須の品にあらず寧ろ粗堅の絹布西洋布木綿等を用ひ粗質を厭はざるべし、然れども遮に所貯の衣服を廢棄するは反て冗費を招くに當らん、故に平日は所貯の品を撰ばず之を用ゐるも亦禁する所にあらざれど朔望或は有時の式に臨んでは必ず粗服を著すべし、江戸邸

内に居つて賓客に接するとも耻ると勿れ、衣袴賜物にあらざる限りは皆粗品を求めて美服を求むべからざる事、近侍の輩は外士の標準となるべきを以て最も意を用ふべし、衣服は冬夏均しく其制を越ゆべからず又近侍に頒賜するには麤品を撰び一般に示すべし、斷然美服を禁ずるは却て困厄を與へんことを恐る、故に來年(安政元年)を期し勉めて其實を擧ぐべし」と

又農業の事を合して曰く

「農は國の根本に候間百姓に困難を及ぼさず追々戸口相増し候様掛りの人人日夜心掛け末々までも行届勸農の文字に相叶ひ候様吟味に及ふべき事

但し取箇夫役相起し收納の時節其外の雜事まで念を入れ上下共に辨利相成候様取計ふべき事」

一茶翁勸農の詞

風流を樂む花園ならて後の畑、前の田の物作に志し自ら鋤を採て耕し先祖の賜と命の親に戀を盡し吉野の櫻更科の月も巳が業こそ樂しけれ朝夕心を留めて打むかう菜種の花は井手の山吹より好ましく麥の穂の色は牡丹芍薬を腹こたへありと覺ゆ朝顔より夕白こそよけれ萩桔梗よりも芋牛蒡に味あり渾て花紅葉より栗柿は寶の植木なり稻の穂並の賑はしく菊の花より腹滿る心地して粟穂に馴る、鶉野邊の蟲の音聞くが面白く遠き

名所舊蹟より近き田圃の見廻りが飽かす松島塩竈の美景より飯釜の下肝要なり上作の名劍より鎌鍬は調法なり書畫の掛物より掛し見る作物の肥を油断せず投入立花の工より茄子大角豆の正風なるか見處多く茶の湯蹴鞠の遊より澁茶を飲んで昔語こそ樂しけれ玉の臺より茅葺の家居か心易く高きに居らねは落るあぶなげなく迷はねは悟らす念佛のかはりに業を怠らす實義を盡すは神詣に比し仁者にならうて山には木を植む智者の心を没て田の水加減を專にし珍肴鮮肉の料理より錢いらすの雜炊か後腹痛る氣遣なしすへて世の中は飛鳥の川の流れきのふの淵は今日の瀬となる如し唐の咸陽宮萬里の長城も終りは亡ひ平相國の驕も一世のみ鎌倉の將軍も三代を過ぎす北條足利の武威盡き織田豊臣の榮も終り一代なり時過ぎ世替れは誠に夢の如し世に稀なる珍味も舌の上にあらうち伽羅蘭麝の薫りもかく内のみ樂は苦の基財寶は後世の障遊興はしはしの夢他の富も羨す身の貧も歎かず唯慎むべきは貧慾恐るへきは奢なり抑々田地は萬物の根元にて國家の主寶なれば父母の如く敬ひ主君の如く尊み妻子の如く育み寸地をも捨てす何處にても鋤先の天下泰平五穀成就を願ふり外になし

今年米親と云ふ字を拜みけり

松浦宗安の勸農詞

田夫も三徳を備へされは叶はず、時に時節を考へ前作相應の出来を知り兼ねて水旱の歳を相し其の覺悟あるは智なり、下人牛馬を養ひ諸作を育て相應のこやしをして水旱風損を繕ろひ作に障る虫鳥獸を退け痛み損するを直すは仁なり、風雨を厭はず寒暑を嫌はず耕作に精を出すは勇なり、此等を勤辨すれば又樂む所多し。先づ寒暑を経て碎けたる葉の春立ち歸りて雪霜薄すらき野山錦立つに隨ひて春風にいろめく面白きは嵯峨吉野の山櫻友もかたらひ興を添ふらむ歌人の長閑き心にも劣るへきかは種子を蒔きて見渡せば夏の夜の霜かど詠せし月の光に異ならず小田鋤きかへし水打湛へたるは五湖の景にも勝り菜圃の花咲き揃ひたるは洞庭の趣にも劣るまし堰に掛かる井戸の下水は龍門の瀧かど疑はれ風にこぼるゝ稻葉の露は玉を亂すかと覺ゆ色つゝ、稻に引鳴子刈穂の暮の風情まで心言葉も及はず彼を見此を眺むるに一として樂ならずと云ふことなし人に斯る趣を勤辨して農業を営まは辛苦を忘れ自ら精勵する心起り従ひて作物の出来も良からん

二宮尊徳の道德四綱目

- 一、誠心を以て本と爲すべし
- 二、勤勞を以て主と爲すべし
- 三、分度を立つるを以て體と爲すべし

四、推讓を以て要と爲すべし

二宮尊徳の報徳仕法

野州櫻町三邑の衰亡を興復し後ち幕府に登用せられて日光神領八十九箇村二萬石の開発を經記したる二宮尊徳の報徳仕法は今も世に最も有名なるものなり、報徳仕法は所謂至誠勤勞分度推讓の四綱領に據りて拓地殖民興産記業富強永安を企圖したるものなり、尊徳自ら局に當りたる場合にありては一に實踐躬行を以て率の機に區み變に應じて決行し殆ど一定の規程あらざりしも其自ら一回も實地に臨まず専ら門下生をして施行せしめたる中村藩に於ては其施行細則ともいふべき成文の心得書を規定せり、是れ實に同藩領内百一箇村の仕法を最も完全圓滿に遂行し得たるものなるを以て左に其要旨を抄録せん

- 一、御仕法村々引受出張之面々、朝、廻村情らす村役人は申すに及ず細民に至る迄厚く御仁恵を相辨へ候様入念に申諭し第一舊弊を除き互に信儀を守り村内睦敷専ら勤業に赴き引立候様實意に世話差加へ可申事
- 一、村方に臨み年來之衰弊を立直し永安之道を得候様取扱候には先づ第一には其村何之爲に斯く衰廢に陥り候哉と其衰貧之根元を見渡し次には土地之善惡銘々分限之大小を見定め次には毎家之勤惰得失を察し且つ所行之善惡邪正を弁じ一村之實事悉く胸臆之間に分別致し然る後廢衰之根元を除き淳朴篤實勤儉之

通に導き一村治く立直り候様誠實之世話差加へ申可事

一、一村之進退所行之善惡勤惰は村内にあるにあらす引立掛合之誠不誠に由ると申す儀を觀念致し専ら下民に先立ち勤勞を盡し仁恕之行を主とし一村安堵之道に導き可申事

一、村方孝行人は勿論總じて奇特之所行有之時は其次第を委敷筆記致し可申上事

一、村方心得違之者有之節は丁寧に利害申し聞かせ改心之所行相立つ様深切に取扱ひ可申僅に一應之理解にて承服不出來逆捨置候は誠心之感通致すべき道を失ひ候儀に付再三反復丁寧之教示を加へ猶改心之所行相立兼候は外掛合へ申談し教誨を相頼み可申事

一、村々御取直之儀は實に御大仁之御仕法に付僅一時之取計なりとも永久安堵之基に相成候様深く勘辨致し取扱ひ申すべく必姑息之取計に陥らざる様可致儀專要之事

一、諸事村内之者より申立候事は兎角己を是とし他を非とするの人情免れ難き事に付必一方之中分を取り直に理解又は取扱等致候而は實事相違に及び民心を失ひ候に付何事によらず双方之是非を能々承り候上教諭を下し可申事

一、村方に臨み年を重ね世話差加へ候に隨ひ心易く度々立入候者は自然愛情を生じ近つかざる者は愛心を生ぜざる道理にて不知々々平生之取扱片落到に相成り易きものに付此所深く心を用ひ下方依怙なりと申様之儀無之様取扱可申事

一、何れの村々も年末困窮に及び人氣風儀も悪く相成居候事ゆゑ之を一洗致し舊復之場に導き候は不容易儀一村の目當と致し候は掛合之行狀に付専ら正路潔白を守り候は素より之儀第一誠意を先立て萬事一身を慎み諸民の嘲り無之様可心掛事

一、一村之人民一體に見渡し大小知愚共に永安之地に御導き被下候仕法に付必愛憎之心を生じ偏頗之理解取扱等無之様深く心を盡し可申事

一、一村の向背人氣之進退皆是御仕法掛之一身に歸し候儀は勿論之事に付村方之宜しからざるは村方の所爲にあらす掛り合の至らざる所と日々我身を顧み我心を責め萬事實意第一に世話差加へ可申事

一、村々出張之面々、月境には暫時引取り役所へ相詰め互に申談し諸普請諸願向等何事に寄らす見込を相立て可否差圖を受け取扱可申事

一、富る者は奢に長じ貧き者は惰遊に流れ終に貧富共に退轉に陥り候は人情之通弊に候間富る者奢を戒め餘財を譲り貧き者一途に勤業に赴き互に讓道之奇特を相立候様教誨に及び引立可申事

一、所謂物之不等は物之情にして村々之情實同一ならざる物毎に相當自然之道なきにあらす、彼に是にして斯に非なることあり、斯に是にして彼に非なることあり、一たび處置其至當を失ひ候へば永年之憂を生じ改むることを得ず、假令小事に似たりと雖も取扱はざる前に御良法之深理を以て其當然之道を量り問合之上取扱ふべく總じて一己之見を以て取計候儀は見合はせ可申事

- 一、地方普請之儀永年之便利に相成り手堅く出来候様心を盡し可申事
- 一、家普請之儀は専ら丈夫を主とし無益之造作無之様世話致し尤も拜借普請奢りケ間敷造作致さざる様敷敷差圖に及び可申事

二宮翁夜話

夫れ人道は譬へば水車の如し、其形半分は水流に従ひ半分は水流に逆ふて輪廻し、全で水中に入れば廻らずして流るべし、又水を離るれば廻る事あるべからず、夫れ佛家に所謂知識の如く、世を離れ慾を捨てたるは譬へば水車の水を離れたるが如し、又凡俗の教義も聞かず、義務もしらず、私慾一偏に著するは、水車を全で水中に沈めたるが如し、共に社會の用を爲さず、故に人道は中庸を尊む、水車の中庸は宜しき程に水中に入れて半分は水に順ひ、半分は水に逆ふて、運轉滞らざるにあり、人の道もその如く、天理に順ふて種を蒔き天理に逆ふて草を取り、慾に随ふて家業を勵み、慾を制して義務を思ふべきなり。

我ものゝ人の物ぞといふものゝ、物はこの世のものでこそあれ

二宮翁夜話

人と生れ出でたる上は必ず死する物ぞと覺悟する時は、一日活れば則ち一日の儲、一年活れば一年の益なり、故に本來我身も(無我の安心を説くもの)無き物我家もなきものと覺悟すれば、百事百般儲なり、予が歌に「かりの身を元のあるじに貸し渡し、民安かれと願ふ此の身ぞ」夫れ此世は我人ともに僅かばかりの假の世なれば、此の身ばかりの身なること明らかなり、元のあるじとは天を云ふ、此のかりの身を我身と思はず、生涯一途に世のため、人のためのみを思ひ、國のため天下のために、益ある事のみと勤め、一人たりとも一家たりとも、一村たりとも困窮を免れ、富有になり、土地開け、道橋整ひ、安穩に渡生の出来るやうにと夫のみ日々の勤めとし、朝夕願ひ祈りて、おこたらざる我が身であるといふ心にてよめる也、是我が畢生の覺悟なり。

報徳結社の要旨を咏める今様歌

有志を多、とり結び善種土臺の二種の金勤と儉との二つにて積立つるこそ始めなれ善種土臺の金を積み先づ實業を奨励し一致の心を堅固にし町村を富すを始めなる各々家業を勉強し諸物産を繁殖し御國を富し家々を富饒になすぞ本旨なる道路橋梁修理普請開墾種藝は勿論ぞ通商交易盛んにし物産改良勤むへし天地の化育を

賛成し造化の神意を奉戴し神德皇德國恩に報うぞ社員の勤めなる教育勸語を守りつゝ父母に孝事し身を修め同胞互に親睦を盡すそ本社定めなる道の教を尊信し勤勞厭はず分外の財を譲りて善の種蒔こそ道の本意なれ内誠心を本とし外勤勞を主となして分に従ひ度を定め讓の道は自他の利ぞ偏に己れが利を射るは是れ經濟と云ひがたし我も富み人も富かし人も富み我も富かし諸共に道徳ならぬ經濟は永遠の道覺束なし經濟ならぬ道徳は勞して功なきものとしれ夫れ報徳の大道は道徳の教を修めつゝ經濟の道を勉強し富と福とを祈るなり最大幸福得る人は生きては福壽量りなく死しては華藏壯嚴の都の花に遊ふめれ壽種は生ひ時かざるはかならず生ぬ世の中ぞ原因ありて結果ある天地の眞理頼むへし積善の家餘慶あり積不善には餘殃あり應報の理を疑ふな天と天地の定規なる

頼惟柔の封事と治務

頼惟柔は安藝竹原の人、杏坪と號す春水の弟にして山陽の叔父たり家を頼兼屋と號し世々紺屋を業とせり、杏坪初め大阪に遊び後春水に従て江戸に至る天明六年三十にして廣島藩の儒員に列し春水に屬して藩學の教授に任す

詩文經藝を以て顯れ殊に和漢の法政に通ず、地方民政に關して建議する所ありき、其の中に「御内密奉申上

候覺」といへるものあり今その要領を摘記せん

- 一、郡治の任にあるものは上下一般其任輕からず其民衆に對するには須らく父母の慈あるべし、細かに人情を察し民衆を教へて仁政を布かざるべからず、請ふ吏を増置して常に郡部を巡回せしめん
- 一、今や社會法新に行はると雖も下吏未だ法に熟せず恐らくは弊の生するあらん、請ふその人を選び郡御奉行に屬せしめ巡回して法の弘布を謀らん
- 一、郷校を定め郡部を巡回して村吏を教諭し呂氏の郷約を斟酌して風化に資せん
- 一、郡政の要務は游民を糾し貧吏を黜け農を勸め賦を薄くするの四條にあり
- 一、土を損せずして下に益ある法あるべし
- 一、郡宮の逸邑は民の疾苦を問ひ俗の善惡を考へ耕作水利等を視て安民の術を講ずべき其民に臨むや廉潔ならざるべからず、而して民を制するは恩威兼施にあり、租を徵するは年の豐歉によりて寬嚴宜しきを
- 一、得ざるべからず、米錢を民に貸して息を收むるの法は貸與の遲速によりて民に利不利あり
- 一、杏坪既に地方民政に關して建議し擢んでられて領内備後の内四郡の郡廻に任す、時に年五十六なりき、蓋し淺野氏の邑安藝八郡備後八郡合せて十六郡四十二萬石と稱す、而して備後の山間五郡の地之を奥郡と呼び僻陬にして地味瘠薄民俗悍最難治を以て知らる、杏坪の任地は此奥郡の内四郡にして所謂郡廻は即ち數郡の代官を統轄監督するの職なり、杏坪は實に此難治の郡廻に當りし也、杏坪固より經論あり述民を糾し貧吏

を蹴け農桑を勸め税賦を薄くして舊來の弊政を除き新に民利を興すに於て意を盡さざるなし、而して其民に臨むや躬行以て之を卒ひ儉素に居りて衆を愛し忠直以て衆を服す、時に養老會を催しては自ら古老を敬待して尙齒の情を盡し郷賢祠を起しては郷先輩の功勞を頌す、是に於て民風厚きに歸し貧なる者は富み惰なる者は勤め面目全く一變せり、今に至るも諸郡多く柿實楮皮を産し間谿谷用水池に富みて水田の耕作周到せるもの實に杏坪の遺績に係るもの多し

杏坪が村役人に示したる口達案は亦封事要領と共に爲政の方針とすべきものなれば左に之を掲ぐ

- 一、當郡の義は從來難治の郡にてこれまでも勿論油斷なく精勤せられ候儀とは存候へども尙又此度拙者共も厚く申候、舊弊相改め然るべき儀もこれあり候はゞ改正致度候間申迄もこれなく候へども一入出精これあり平生諸取引も澁滞なく議論切磋萬端正道に取捌き候様平生相心得らるべく候、何卒一同力を協せ諸郡に拔出で郡風宜しく相成候様致度これに仍りて心付のこれあり候はゞ聊かも用捨なく夫々存寄の書付見せ申すべく候事

黒住宗忠の「日々家内心得」

- 一、神國の人に生れ常に信心なき事

一、腹を立て物を苦にする事

一、己が満心にて人を見下す事

一、人の悪を見て己に悪心を増す事

一、無病の時家業怠りの事

一、誠の道に入りながら心に誠なき事

一、日々難有きことを取外す事

右の條々常に忘るべからず恐るべし

立向ふ人の心は鏡なりおのが姿をうつしてや見む

細井平洲

よき役人と申は深切なる醫者の病人の死生を身に引受けて療治に心を盡すかごとく民の苦樂を身に引受けて晝夜世話をまめやかにする人を良吏とはいふなり醫者深切なれば食をくひかけ眠き目をこすりても匙よ藥箱よど夜る夜中も眠はすかけ走るこれ如才なき醫者なり深切なる役人は馬も駕籠も捨て歩行はたしにもなり民の爲を思へは苦勞大義もはすればはて風雨寒暑の界もなく世話のとくとくを樂しみに思ふ人誠に忠なる役人とい

ふなり火燧に足をあたためて病家にて待ち兼ねるも思ひやらぬは水くさき醫者なり頭痛疝氣を申立て腫ひ裁許の延引するもきのとくからぬは情なき役人なり故に明君賢相は人を知るを最上の智とし誅賞に怠り給はぬを急務とす富る故に奢れは貧になるまで取上れば自然と奢はやむと心得たる役人は聚斂殘賊の惡吏なり食ふ故にふどりたれば斷食させて肉をおとさんといふは下手醫者なり奢るゝちは樂みなるやうなれども奢られぬやうになれば苦き故におこらるゝうちに儉約をしていつまでもたのしみを失ふなど教へ導く役人は公正忠貞の良吏なり食過ればふどり過て病氣の出る故に食はるゝうちより食をひかへていつまでも達者に病ぬやうにせよといふは上手醫者なり此間毫毛の違ひにて君を仁君にすると君を不君にするとのわかれめなり

上杉景勝の民治

上杉景勝は謙信の後を嗣て養父の志を奉じ恩威並ひ行ふを以て其政を爲せり是を以て越の民皆悦服せり天正十九年景勝麾下の地頭等に令示して曰

- 一、人の善悪を以て賞罰を施す事
- 一、地頭の正邪に依り百姓善悪にうつり候ものに候、聊たりとも油斷有之間敷候事
- 一、年貢諸掛り等はなる程勤辦致、惡作の年は前年より少小たるべき事

- 一、何事も古法を守り利慾の爲に新法を立て百姓を苦しませ間敷候事
 - 一、忠孝の道理常に教訓可致事に候、女共貞節の道理自然相分り候様肝要に候事
 - 一、年貢物取集めに相越させ候役人共百姓に對し苛察の義無之様可申付候事
 - 一、百姓は國の寶に候間成る程勤忍可致候彌々不法申蒙りらめんに拘はり候は、討捨て可申候事
 - 一、訴訟は双方共能々聞糺し可致沙汰必ず依估最負いたす間敷候事
- 右の條々堅く可相守候也 以上

天正十九年辛卯十月

景勝

地頭 大名 中江

景勝は此の如くにして「百姓は國の寶なり」との主旨を守り之によりて愛撫を主としたりしを以て越民の上杉氏を慕ふ情頗切なるものあり、慶長三年上杉家が二百三十年來の縁故を斷ち越後の民に訣別して會津に移るや越民の悲歎殊に甚しかりき本朝戰國策に曰く

景勝會津移封の時越後一國の百姓聲々に泣哭む事國中目も當て難し二百年來の國主の事なれば上杉家中在々へ縁組みせし武士何千人といふ數を知らず親子兄弟生別れの思なりしかば互に再會の期難計男女の愁聲國中に滿つ、景勝越後出立の節は春日山より下越後通り國中新發田、赤谷、狐尻、土納木、下網、木津川

邊迄も國中の男女跡を慕ひて數萬人「御屋形様今生の拜み納めなり是非にも我々一生の内越後の國へ御歸國を」と喚叫の有様を見給ひて喜平治の若盛より涙こぼし給ふ事一度も無き景勝なれども百姓男女に送られ一日二日は食事も進み給はず馬上にて泣て入部有し也

毛利輝元の内諭十二箇條

毛利輝元は元就の孫なり豊臣氏に屬して數州を領し祖法に遵ひ能く意を民政に用ひたり慶長十二年十月内諭十二箇條を下して重臣を戒飭せり其文に曰く

内々の心持申聞けの條々

- 一、今ほどの儀年寄候へば相草臥、誼法度申出儀無_二正儀_一事のみ候其故次第主儀をまかるしめあなごり候間就_レ其申聞候事
- 一、惣別の心持珍しからざる儀ながら親子親類縁者知音に候共主儀不_二存替_一一筋の覺悟議定の事
- 一、威嚴だて停止の事
- 一、聊の儀もことをたくみ偽を申拔候儀停止の事
- 一、ひいきへんばなき心持第一に候就其段々申聞事

付、ひいきの者無_二奉公_一其外無_二心得_一之儀令異見引なおし候事

付、道理を持たながら其身存分得_二申分_一ざる儀をば申理遣すべき事

付、役目不成迷惑を極候者には心付遣すべき事

右のひいきは主儀へ對し馳走候

- 一、ひいきの者として主儀へちがひ又物ごとにて不届無心得の儀をむりにかたん候て、おしかへし我がひいきとて人がわるく申候なごり心得主儀の爲めに悪候儀せりりくさし候義大に曲事候事
- 一、又我が氣に合す候者として、無き事を作りわがし、曲事に申成儀、然るへからず候たご善惡有体の分別事
- 一、算用方右同前の事
- 一、主儀のために惡儀聞及候儀行上申すへき事
- 一、此方失念の儀候はん時はさし出候とも無用捨申すべき候事
- 一、申聞にこれあることをば少しも他言あるべからざる事
- 一、人の物を遣候をば之を取るへく其に段々分別儀定有之候禮物にふけり、言はれぬかたん然るへからず候いかほど取候ても有体の儀定の事、又取り候て有体の儀定ならず候はごはたといけん仕り其上を以て申聞すへく候間兼て届け申聞かせ候

以上

渡邊華山の商業訓

- 一、先づ朝は召使より早く起きよ
- 一、十兩の客よりも百文の客を大切にせよ
- 一、買人が氣に入らず返しに來らば賣るときよりも町噂にせよ
- 一、繁昌するに従つて儉約せよ
- 一、小遣は一文より記せ
- 一、開店の時を怠るな
- 一、同商賣が近所に出來たら懇意を厚ふし互に勵め
- 一、出店を開いたら三個月は食料を送れ

伊呂波歌

古川禪師

いとけなきをば愛して通せ

腹か立ても過言はいふな
 ほめて貰うて高慢するな
 となり近所に不通をするな
 理くつあるとも皆まで言ふな
 流浪人をば憐み通せ
 若き間はそのみち／＼の
 善きもあしきも人ごと言ふな
 禮義正しき浮世を渡れ
 常に身持も大事な事よ
 儼がないとて世を恨むるな
 報い／＼に貧富はあるよ
 今の難義を思は、尙も
 親へあてつけ不孝をするな
 役をするなら正路にさばけ
 劍の地獄へ此世で落つる

うらみ受くるも我心から
 隔てなきをば遠慮に思へ
 近き中にも又垣をせよ
 ぬしによりては大事な事よ
 終り果てねば我身も知れぬ
 稼業大事と浮世を守れ
 たどひ高きも又賤しきも
 疎略者ちやと言はれぬ様に
 寝ても起きても唯正直に
 樂な身すぎは一人もないぞ
 怨みあへなよ此世の事を
 後の世が又大事なことよ
 國のおきては大事に守れ
 眼かすめて貪慾するな
 不實落度の其ある時は

こゝに日頃の恨みが御座る
 手前よいとて權威を出すな
 酒をまらば内場であがれ
 油断するのは落度のもともよ
 店をじし人ほろぼすよ
 撰べたかひに諸藝の道を
 文字を書かねば愚鈍なものよ
 すぐに心を用ひて習へ
 上下萬民心にかけよ

道 歌

一どきもあたにはなさしさとては あひかたき日の暮れやすき日を

榮耀する身は苦を見る本よ
 わるいことなら必ずよけよ
 きいてたしなめ浮世のことを
 滅多無性に貪慾すれば
 知らぬ事なら大事に思へ
 日頃心をつくしてならへ
 世間知らねば浮世も知れず
 京も田舎も皆をしなへて

西人が觀たる日本の風儀道德

(日本西教史)

織豊の時代耶蘇教の本邦に行はれし頃在留の外國宣教師等が我が民風を視察し國民の行狀を探りて其梗概を

筆にしたりし記事は佛國の刊行に係る日本西教史に載せて詳なり。因て茲に該書の翻譯書中より風儀道德に
 關する項を抄記して當時に於ける西人の之に對する批評感想の如何を示さん

日本人は一般の氣質として最も名譽を重んじ他人より賤めらるゝを嫌忌憤激すること外國人の比に非ず
 専ら名譽を得んとし拔群の成功を望むが故に一途に自己の職務に勵精し些事たりとも不當の所業を爲さ
 ず

日本人は其身分に準じ責任の義務を怠らざるにより不正の言語を發し爲めに禍害を招くが如きこと少し
 而して諸人互に相尊敬し就中貴族間の禮讓は極めて嚴格丁寧にして各々位階地位の高下に應じ座作進退
 の容儀を整へて之を表明す 下賤貧困なる傭夫の如きも相互に敬禮あるのみならず又當然受くべき相當
 の待遇を望む 彼等か人に雇傭せらるゝに際し雇主の待遇若し其意に適はざるが如きことあらば直ちに
 其雇傭を解かれんことを要求す

日本人は貪慾を嫌忌す 貪慾なる者は卑劣にして廉耻心なき者と看做さる盜賊を惡むこと殊に甚だし縱
 令些少の物品たりとも之を盗みし者發覺して捕へらるゝに於ては直ちに之を殺戮するも敢て異議を挾む
 者なし其之を殺戮するの權利を有する所以は縱令初は細事を爲すに過ぎずとするも遂に大賊たるに至る
 べければなり

日本人は凡て不正なる事を忌む故に賭博詐欺の如き不義の富を爲し不良の情慾を誘導する所爲は最も嫌

へりされば商人にても買主が若し誤まりて多く價を支拂ふことあらば決して之を受けずして返戻するを常とす

日本人は其父母を尊敬すること最も切なり若し子にして父母に對するの義務を缺ぐときは忽ち神罰を受けるものと信せらる君主の行爲に於て特に賞揚すへき風習あり即ち君主たる者は通常其家臣の中より篤行廉直なる者一人を選定し之をして自己が日常に於ける言行の過失を諫諍せしむる事なり畢竟人として各々多少の過失あらざるはなく而かも左右に親昵する佞臣は却て君主の不徳を助長せしむるが故なり他人の謗を受けんよりは寧ろ家臣の諫を受くるに若かずと思へるなり

日本人は人を品臨するに單に外見の裝飾を以てせず蓋し貴族大家と雖も時としては領地に離れ貧困に陥ることなきを保せざればなり

日本人の勇氣と堪忍の強きとは殆んど測知すべからず災害に罹りても悲まず危難を見ても畏れず平常の言語動作に於ても怯懦と見侮られざらんことに注意し奮然として直進す七情を自から抑制するの習慣ありて縱令幸福に遭ふも歡喜の色を表はすを耻とせり

故に親友たりとも自己の憂苦を告げて同情を求めず蓋し之が爲めに他人の安靜なる心を動かし且自己の柔弱を見はすを恐るればなり

英國ポートサンライトの新農村

英國リバプール市を距ること三哩の地にポートサンライトの新農村あり。田園都市の模範として其名中外に著はる。石鹼製造業者レバーが夙に勞働者を混濁せる都市生活の渦中より救出し之を風光明媚なる新農村に移して田園生活の趣味を享受せしめんとし巨額の資本を投じて創營したる者なり。人若し一たび此地に入りて其旅館に投せんか宛然一帖の畫圖の如く高層巨廈相連なりて繞すに花園を以てし中に新築せられたる寺院玻璃窓外に放たんか宛然一帖の畫圖の如く高層巨廈相連なりて繞すに花園を以てし中に新築せられたる寺院の巍峨として高く翠蒼の間に聳ゆるあり美麗なる三個の校舎も亦其間に駢立して其境や幽雅自ら心神を洗ふに足れり。更に去りて其市街に到れば青年の子弟が體操場に入りて快活なる遊戯に餘念なきあり公園に入れる少女が嘲哢たる音樂に耳傾くるものありて白く塗れるグラットストーン館青く彩れるヒュルム館の庭園又は社交俱樂部の芝生に兒童の嬉々として戯むるもありて飛鳥倦んで林に還らんとするの頃ひ晝間工場に働ける勞働者が終日の勞を慰めんとて家庭に歸り來れる樂しき夕の光景等殆ど描き盡すべきにはあらず終りに記すべきは日常購買組合即是なり此事業は固と職工自身の經營に係れるが故に良好なる物品を低廉に買求むるを以て其主旨となせり此新農村に於ける總ての建築費は約三百五十萬圓を要したれども一戸の家賃は僅に三志乃至五志に止れりと云ふ。念ふに斯かる低廉の賃料に依りて斯かる樂園の一住居を占め得べき新農村の居

白國に於ける勤勞少女の表彰

善行者の表彰は其方法や固より尠からずと雖も勤勉なる青年の男工並に妙齡の女工に對して之が表彰の途を開きたるは白耳義の富豪バスターンを以て嚆矢となす、バスターンは年齢十六歳以上二十五歳以下なる未婚の男工及女工の中につきて品行方正に且勤勉にして家族に忠實の聞え高き者を撰び之に對して毎年表彰金を與へんどの主旨に依り十萬「フラン」の表彰金をば白耳義の都市に寄附せり、賞與金は被賞與者をして貯蓄心を養はしめんが爲め官立貯金所の通帳を以て之を授與するを例とし且當選者にして婦人なるときは賞與金の外更に「バスターン」賞與金を刻印したる小形の金製十字架を授與するとなせり、其結果は甚だ良好にして表彰を受けたる者は其後も概ね職工の模範となり居りて益々其業に盡瘁せざるはなしと云ふ、次の書翰はリエージュ市よりして賞金を授與せられたる少女よりバスターンに宛てたる禮狀にして曩に本省より其事蹟を照會したるに對するの答書に添ふるにバスターンより送り來れる該書面を以てしたるものに由れり

受賞少女の禮狀

私は去る日曜日に賞金拜受の爲め市廳に赴き候ひたるは私の甚だ欣喜に堪へざる所に候ひき、偶々大人

自らリエージュ市に來られ賞金授與の盛典を舉行せらるゝを傳聞致したる時に於ける私の悦は實に譬へん方もなく殆んど手の舞ひ足の踏む所を知らざるの有様にて候ひき、大人私は授與され候十字架を胸間に佩ふる事を得候は私の最も光榮に存する所に候、私の悦は勿論母上も亦殆んど感謝に言葉これなく候賜はりし該十字架は私の生命のあらん限り決して我身を離し申まじく候、私は母上と共に亡き父上の墓所に詣りて大人より賜はりし十字架を墓前に供へ亡き父の鴻恩に感謝し暫く祈念を凝らして歸宅致候大人に對し今日に至るまで久しき間何等の謝意をも表せず打過さ候ひしは其罪決して漫からずと存じ候へども大人の御住所を知るの便を得ざりし次第に候へば悪しからず御諒察を賜はりたく候

米國に於ける青年會の趨勢

泰西の諸國に在て青年會の設立せられたるは今を距ること六十六年の前即ち西曆一千八百四十四年倫敦の紳商ジョーヂウキリアムの創意に成れるを以て之が嚆矢と爲す、當時英國に在つては都市の發達や日を逐ふて殊に著しきものあり地方よりして都會に來集するの青年は陸續として踵を接したりしが是等青年の多くは中央都會に來りても別に親しき知人のあるにもあらず又行きて宿るべき相當の場所あるにもあらざれば自己が起臥する下宿屋の外には更に家庭の趣味を味ふべき處なきを免かれず隨ひて彼等の多くは何れも冷淡たる

都會の空氣を呼吸しつゝ日々遭遇する所のものは只其品性を墮落せしむべき幾多の惡誘惑あるに過ぎざりしなり。ジョージ、ウヰリアムは居常此状態を目撃して痛く其不可なるを慨し仍ち此等不幸の青年を救濟せんが爲に茲に基督教青年會なるものを組織するに至りしなり。

英國に次ぎて青年會の設立せられたるは之を北米合衆國とす、千八百年の調査に依るに同國に在ては人口八千以上を有する市街地の總人口は之を米國全體の人口に比して尙ほ二十五人に對する一人の割合なるに過ぎざりしかご尋て八十年を経たる一千八百八十年に至りては早くも四人に對する一人の割合を算するに至れり、以て都市が如何に急速の進歩を以て其人口を増殖したりしかを推思するに足るべし、其都會に廣集せるもの、中には各種の誘惑に陥りて其一生を誤れるものも亦決して尠しとなさず、是を以て青年會の企畫する所は夜學校、勞働紹介所、學生寄宿舎、聖書研究會、音樂會、親睦會及鐵道事務従事者青年會、其他旅行券の發行等に依りて各種の設備を講じ身心を修養するの途殆ど盡されざるなし。更に米國の特色とする所は獨り校外の青年會のみならず大學内に在りても亦學生青年會なるもの組織せらるゝありて何れも盛況を呈せざるなく青年會の數實に四百五十を算して其會員數や無慮二萬八千人の多きに達せり、斯くも發達したるの青年會は何れも常に學生其の者の爲めのみならず風化上實に重視すべきものたるを失はず、殊に會員が各其の執る所の業務に従ひて各種の集會を開き以て其の事業に必要な精神の涵養と社交上の娛樂とを享有することを得せしむるが故に今や歐米の青年會は社會事業の最も大なるものとして思惟せらるゝに至れり。

○徳川光圀の壁書

- 一、苦は樂のたね樂は苦の種と知るべし
- 一、主人と親とは無理なるものと思へ下人はたらぬものと知るべし
- 一、子ほど親を思へ子なきものは身にたくらべる近き手本と知るべし
- 一、おきてにおちよ火におちよ分別なきものにおちよ恩をわするゝ事なかれ
- 一、欲と色と酒とをかたきと知るべし
- 一、朝寢すべからず咄の長座すべからず
- 一、小なる事は分別せよ大きな事は驚くべからず
- 一、九分にたらず十分はこぼるゝと知るべし
- 一、分別は堪忍にありとしるべし

○伊藤東涯の壁書

跬歩爾の所生を忘るべからず一日爾の所職を嘔うすべからず所生は恩天の如し天を忘るれば自斯に覆る所

職は惟れ身の本、本を忽にすれば命必ず極まる惟れ吾言にあらず寔に帝の則此れを以て君に事ふるときは忠臣たり此れを以て人に交はるときは徳を失はず

五八

○中根東里の壁書

- 一、父母をいとしみ兄弟にむつまじきは身を修むる本なり本かたければ末しげし
- 一、老を救ひ幼をいつくしみ有徳を尊び無能をあはれむ
- 一、忠臣は國ある事を知りて家あることを知らず孝子は親あることを知りて己れあることを知らず
- 一、祖先の祭を慎み子孫の教を忽にせず
- 一、辭はゆるくして誠ならむことを願ひ行は敏くして厚からむことを欲す
- 一、善を見ては法とし不善を見てはいましめとす
- 一、怒に難を思へば悔にいたらず欲に義を思へば恥をとらず
- 一、儉より奢に移ることは易く奢より儉に入ることはかたし
- 一、樵夫は山にとり漁夫は海に浮ぶ人各々その業を樂むべし
- 一、人の過をいはす我功にはこらす

- 一、病は口より入るもの多し禍は口より出づるもの少からず
- 一、施して恩を願はず受けて恩を忘れず
- 一、他山の石は玉をみがくべし憂患のことは心をみがくべし
- 一、水を飲むで樂むものあり錦を衣て憂ふるものあり
- 一、出づる月を待つべし散る花を追ふこと勿れ
- 一、忠言は耳にさかひ良薬は口に苦し

○小河立所學規三條

- 一、己れに反求して人に責むる勿れ
- 一、忠以て己れを盡くし恕以つて人を待つ
- 一、人の詐を逆へず己が不信を思へ

○格言

○未だ曾て邪正に勝たず (菅公)

五九

○心を平にし氣を和にす是れ身を養ひ徳を養ふの工夫 (益軒)

○窮達は命なり吾れ奚ぞ預からむ吾我れにあるものを盡くすのみ (辛島撫井)

○往日の蹤を追ふこと莫れ來日の杳なるを逐ふること莫れ唯々一日目下善をなすを勉むるのみ是の如くにして後積み歲月を度ること久しければ則ち自然に習慣し善斯に性をなさむ (川井東村)

○重遲深沈のものは能く大事を處す輕躁淺卒のものは小事を處すること能はず然らば即ち事々物々輕卒に之を遇すべからず至微至易のものと雖も當に重沈を以て之を視るべし (陶山鈍翁)

○心平に氣和すれば溫柔と雖も強毅奮ふべからざるの力あり公を乗り正を持すれば迂遠と雖も透徹拘すべからざるの權あり以て人物を語るべく以て世務を言ふべし (伊藤竹里)

○日晷一たび移れば千歳再來の今なし形神既に離るれば萬古再生の我なし學藝事業豈悠悠なるべけん (佐久間象山)

○已れに誠ありて人能く之れを信す苟も人の信を欲して誠を已れに立てず豈に能く人を動かすものならんや (鐵孤山)

○已れを責めて人を責めざれば怨なし (伊藤仁齋)

○たゞ誠あれば感じ感ずれば應ず誠なければ感せず應ずれば忽ちあり應せねばおのづからなしこれ天地の妙用にあらずや (室鳩巢)

○黙は言はざるにあらず言必ず則あり言妄に發せざるを默とする所以なり人を失ひ言を失ふは不智惟れ均し其言を失はんより寧ろ人を失ふに失せよ若し言行を顧みれば豈容易に談せんや口を放まゝにして大言するは君子の慚づる所なり (安東省庵)

○凡そ事専ら理によりて斷決するときには殘忍刻薄の心勝ちて寛裕仁厚の心少し上の徳既に菲薄にして下必ず損傷多く人も心服せず須らく長者の氣象ありて方に可なるべし、滿損を招き謙益を受く時れ乃ち天の道なり積土山を成せば風興り積水淵を成せば蛟龍生ず積善徳を成せば神明自ら得られ聖心備はる (中江岷山)

○道邇しと雖も行かざれば至らず事小なりと雖も爲さざれば成らず (荀子)

○倉粟實れは禮節を知り衣食足れば榮辱を知る (管子)

○其義を正して其利を謀らず其道を明かにして其の功を謀らず (董仲舒)

○見る所期する所は遠くして且つ大ならずんばあるべからず然れども之れを行ふことは亦須らく力を量りて漸あるべし志大にして心勞し力小にして任重くば恐くは終に事を敗らむ (程明道)

○人を動かすこと能はざるは只是れ誠至らざればなり事に於て厭倦するは皆是れ誠なき處なり (程伊川)

○陰徳は耳に鳴るが如く已れ之れを知る (李謙)

○欲淡なれば心清し心清ければ理見はる (葉敬軒)

○事を處するの法已れを正うするを先きとなし理に順ふて以て之を行ふ人の從違必とすべからざるなり時好

に趨るべからず然れども理に順ふ處天且つ違はず況や人に於てをや故に行得ざるあれば皆之れ己れに反求す (胡敬齋)

○鳳凰千仞に翔るの氣象あれば即ち區々たる聲利の爲めに動かされず (葉敬軒)

○有餘を待ちて而して後人を濟はば必ず人を濟ふの日なけん有餘を待ちて而して後書を讀まば必ず書を讀むの時なけむ (史指臣)

○善をなすは重きを負ふて山に登るが如し志已に確なりと雖も而も力尙ほ及ばざるを恐る惡をなすは駿に乗りて坂を走るが如し鞭策を加へずと雖も而も足亦制する能はず (林君復)

○山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し (王陽明)

○人の功を記して人の罪を忘るゝはこれ長者の人心を得る所以なり (貝原益軒)

○煩を厭ふは是人の大病、これ人事の廢弛、功業の成らざる所以なり (全)

○フ ラ ン ク リ ン 格 言

○怠情者に易い事はなく勤勉者に難い事はなし晩起者の駈け足夜になつても仕事に追ひ付かず怠情者の引摺足貧乏か直ぐに追ひ付く

仕事を追ひ掛けよ仕事に追ひ掛けらるゝな

早寝晩起は病氣貧乏馬鹿の藥

働くものは願かけず

空望で生きてるものは空腹で死なん

骨を折らすに得は取れず地面がないから手足で工面

藝あるものは地面持職業あるものは官祿持

働き人の家には貧乏神が覗いてもはいれはしない

勤勉は借金を拂ひ自暴は借金を増す

勤勉は幸運の母天は精出す人には何も滲ます怠情者の起きぬ間に精出して耕やせ秋の實入りは賣つて餘

つて倉に一杯

怠情より難儀起り佚樂より苦勞生ず

立て居る百姓は膝を折つて居る旦那より脊が高い

懈怠は猶鏑の如く勞働よりも速に身体を衰弱ならしむ日用の鍵は光澤あり

世の中は寶積み置く無盡藏之れかほしくは働いてどれ

生命が大切なら時間を殺すな生命は時間で出來て居る

「また早い」が何時も遅くなる
今日の一日は明日の二日に均し
明日せんと思ふ仕事は今日爲せ

○道 歌

人はたゞ忠と孝を守るべしその餘のことは時のなり合
草も木も佛になると聞く御法心ある身はたのもしきかな
はたらけ上ほこりまぶれもいましばし やがてはみだのしやうとなりけり
のちのよをみだにまかせて手あしをば うきよまかせにくちにねんぶつ
よのなかにひとのあしきをめにつくは わがみのみねぬめくらなりけり
動かして動くも心動かして動かぬものも心なりけり
君が代を思ふ心の一すちに我身ありとはおもはざりけり
精出して稼げば貧もをい付す樂は世界となるは目のまへ
貧乏でくふれくはずにくらしても悪事をせねばいつも極樂

むまれてはしぬるものぞとこころわてじひとなきけで人をたすけよ
忠孝の道より外に道をなき佛の道もこれよりぞ入る
つぎ木でもつがざる木でも同じことやしなひうれは花も實もなる
堪忍といへば易きに似たれども 己にかつのかね名なりけり
腹立ては胸に手を置き 指を折り三日を待つて口にはくべし
明日ありと思ふ心にだまされて 今日を空しく過す世の人
善となり悪となるのもおのれから 心ひとつのむけしだいなり
照し見る佛のみすと聞くときは 只朝夕にうれしはづかし
一聲もほとゝきすよりきゝたきは 誠の道をかたる世の人
我をすて人に物とひ習ふこそ 智慧をもとむる秘法なりけり
春くれば夏くる物をこしらへて 今日一日もあだにくらすな
人多き人の中にも人ぞなき 人になれ人人になせ人
瀧登る鯉の心は張弓の ゆるめば落つるもとの河瀬に

移り行く始め終りや白雲のあやしきものは心なりけり
 身にもたる玉といへども磨がすばあたら光の世には知られじ
 磨いては磨いただけに光るなり性根玉でも何の玉でも
 忘るなよ春は耕したねかして夏は耘秋は收めて
 折々に遊ぶいとまはある人のいとまなしとて文よまぬかな
 世の中に書くべき事を書かすして事をかくなり恥をかくなり
 古への道を聞きても唱へても我が行ひにせずば甲斐なし
 手や足の汚れは常に洗へども心の垢を洗ふ人なし
 朝夕に顔と手足を洗ふなり心の垢もすくべきなり
 煙管さへ心のやにを掃除せずがん首ばかりみがく世の中
 植て見よ花の育たぬ里もなし心からして身は賤しけれ
 目鼻口手足は人の並なれど心一つで廢る身体ぞ
 見る中に早やいろ／＼とからくりの變り易きはひとごころなり
 恥を知れ恥を知らぬは恥をかき恥に過ぎたる恥はあらしな

世の中を恥ぢぬ人こそ恥ぢどなれ恥ぢる人には恥ぢど少し
 つとめても又つとめても勤めてもつとめたらぬは勤めなりけり
 恐るべし槍よりこわき舌の先これが我身を突きくづすなり
 眞實の目が明かぬからうろたへて我と我が見る憂い目辛い目
 八百の嘘を上手にならべても誠一つに叶はさりけり
 濁りなき人の心に水すまばのどけき星の影も見えなむ
 米蒔いて米がはゆれば善悪には悪が報うとぞ知れ
 よこしまの非をば恐れて正直をまもる人をば神も守らむ
 たんせいは誰知らずともおのづから秋のみのりのまさるかすく
 私を離れて見れば心ほどあかるき鏡世になかりけり
 我が心鏡に映るものならばさぞや姿の見にくかるらむ
 我が善きに人の悪きがあるものか人のわるきは我が悪しきなり
 みがあるとは稲はうつぶく人は身が重くなる程のしあかるなり
 おそろべし愚痴と短氣の胸の火がわれど我が身をこがす焼餅
 世の中の人は知らぬと科あれば我が身を責むる我が心かな

外よりは来る盗人に限りあり 限りの知れぬ内の盗人
 外からは手も着けられぬ要害を 内から破る栗のいがかな
 世の中の人を悪とは思ふなよ 我だに善くは人も善からむ
 三度炊く飯さへこわしやわらかし 思ふまゝにはなりぬ世の中
 事足れば足るにまかせて事足らす 足らて事足る身こそ安けれ
 不足をは唱ふる家は恐ろしく なか／＼もつて寄りつけぬなり
 やぶれたる着物をきても足ることを 知ればつゞれも錦なりけり
 上見れば及ぼぬことの多かりき 笠着てくらせ己か心に
 飯と汁木綿着物は身を助く その餘は我を責るのみなり
 一代の守本尊をたづぬるに 我人ともに飯と汁なり
 善悪の人を見る目はありなから 我身の上は烏羽玉の暗
 掃けば散り拂へばまたもちり積る 人の心も庭の落葉も
 身もつかす目にも見ねぬごいつの間に ほこりの溜る袂なりけり
 丸くとも一角あれや人心 あまり丸きは轉ひ易きぞ
 姿こそ深山かくれの朽木なれ 心は花になさば成りなん

うつすとは月も思はずうつるとは 水も思はぬ廣澤の池
 上を見ず稼ぐ打出の小槌より 萬の寶湧き出つるなり
 憎むとも憎み返すな何時迄も 憎み憎まれ果しなければ
 つゝしみを人の心の根とすれば 言葉の花も誠にそ咲く
 あすも亦朝疾くおきて勤めばや 窓にうれしき有明の月
 誰も見よ満つればやがて虧く月の いざよふ空や人の世の中
 家内中なかのよいのが寶船 心やす／＼世を渡るなり
 おもひやれ使ふも人の思ひ子よ 我かおもひ子に思ひくらべて
 つく／＼とおもへば悲しいつまでか みにつかはるゝ心なるらむ
 しやうちきに立つた柱はほそくとも はありもつかす朽ちもせぬ也
 ぐる／＼と凍るひまなし水車
 長命はたゞ働くに如くはなし 流るゝ水の腐らぬを見よ
 明日ありと思ふ心のあた櫻 夜半に嵐の吹かぬものかは
 この秋は雨か嵐か知らねども 今日の務めの草を取るかな
 我といふ小さい心捨てて見よ 大千世界障るものなし

天地の寶つゝみおく無盡藏 鐵で掘り出せ鎌でかり取れ

七 福神々 詠

人みな的心一つにかしこくも
七つのさちの神いますかな

大黒天 (勤 勉) 忠孝の打出の槌にかんにんの 袋をたもつ人をめぐまん
 惠比須 (儉 約) めでたいと世々をまもらん正直に ゆがまぬ釣のすぐな人をば
 福祿壽 (高 德) 神儒佛を尊む人ぞ福祿壽 長くかしらにやとりまもらん
 布袋和尚 (大 量) にこゝと腹を立てすむつまじく 家内和合の人をまもらん
 辨財天 (愛 敬) むりをせず理非明白に辨ふる 人にたからを恵みあたへん
 壽老人 (長 壽) 慈悲ふかく陰徳を爲すめいゝの 子孫に長く福壽あたへん
 毘沙門天 (威 嚴) 慾惡の鬼をころして如意寶珠 みかく人をば常に守らん

金 の なる 木

正 直 (しやうじ木) 行 正 (おこないたゞし木)

朝 起 (あさお木) 無 邪 (よこしまな木)
 慈 悲 深 (じひふか木) 研 心 (こころをみが木)
 潔 (いさぎよ木) 勤 忍 強 (かんにんつよ木)
 萬程之能 (よろづほどのよ木) 親 類 親 (しんるいしたし木)
 辛 抱 強 (しんばうつよ木) 世 間 仲 善 (せけんなかよ木)
 無 油 斷 (ゆだんな木) 謹 與 喜 (つゝしみよ木)
 加 勢 義 (かせ木) 就 善 (せんにつ木)
 費乃名喜 (つひねのな木) 省 惡 事 (あくじをはぶ木)
 養生宜 (やうじようよろし木) 仰 天 道 (てんどうをあふ木)
 家内睦 (かないむつまじ木)

七 不 道 徳

一、奢 侈 身分不相應の贅澤を爲す事
 二、詐 欺 人類の最も忌み嫌ふ所にして終に家産をも減す事

326
98

- 三、利己又私利 唯自分あるを知りて他あるを知らざる事
- 四、因循 姑息と同名ものにて所謂一時逃れの事
- 五、遊惰 身代豊なる人家業を大切にせざる事
- 六、懦弱 臆病にして何事を爲すにも恐れを抱き奮然起つて事に従はんとする如き剛毅心なき事
- 七、忘國 不道德中の最頂巔我國家をも忘るゝ事

我がよきに人の悪はなきものぞ
人の悪きは我が悪きなり

大正四年五月十九日印刷
大正四年五月二十五日發行

宮崎縣

印刷者 北 林 祿二郎
宮崎縣宮崎郡宮崎町大字
上別府二十六番

印刷所 北 林 活版所
宮崎縣宮崎郡宮崎町大字
上別府二十六番地

326
98

終